



TITLE:

京大広報 No. 392

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

---

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 392. 京大広報 1990, 392: 937-942

ISSUE DATE:

1990-06-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209285>

RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

# 京大広報

No. 392

京都大学広報委員会



汚泥中セルロースの分解酵素を生成するカビ群 (×130)

—関連記事本文938ページ—

## 目 次

### <大学の動き>

ポリテクニク大学との学術交流…………… 938

### <紹介>

工学部衛生工学教室…………… 938

平成2年度創立記念行事

学術講演会の開催…………… 940

平成2年度創立記念行事

音楽会の開催…………… 940

### <随想>

冠島の小鯛釣り

名誉教授 水野 政夫…………… 941

### <コラム>

日本聴倶楽部訪問記

保健管理センター 桑名 麻理…………… 942

計 報…………… 942

## ＜大学の動き＞

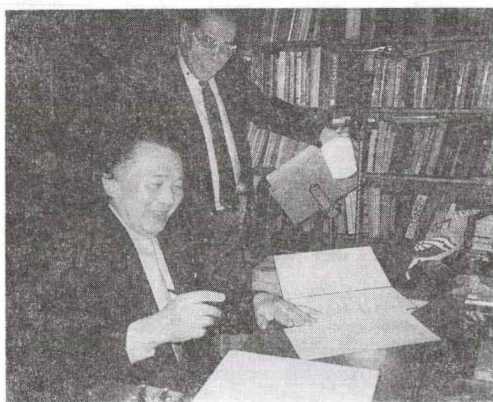
## ポリテクニク大学との学術交流

本学とアメリカ合衆国ポリテクニク大学との「学術交流に関する一般的覚書」が、平成2年4月28日にニューヨークで交換された。

これは、昭和62年12月以来同大学より、本学との学術交流協定締結に関して提案があったものである。

本学では、これについて検討が進められると同時に、国際交流委員会の答申（関連記事『京大広報』No. 363）に沿って同大学と協議が続けられ、平成2年4月「覚書」を交換することが了承された。

この度、西島総長がニューヨークの同大学を訪問し、「覚書」が調印された。



## ＜紹介＞

## 工学部衛生工学教室

衛生工学教室は1958年4月、本学工学部14番目の学科として創設された。衛生工学は人間の健康及び生活環境に係る諸問題を工学技術を中心とする科学的手法によって解決するための学問であり、その究極の目的とするところは、地球環境の保護、人間の福祉の増進と高度な文化的かつ快適な生活空間の創造にある。創立以来、大気汚染、水質汚濁、土壌汚染、騒音・振動、悪臭、放射性物質による汚染等といった環境問題、及び安全でおいしい水道水の供給、効率的な下水道の建設、適正な廃棄物の処理・処分・資源化等に関する教育・研究に多大の成果をあげている。

近年、環境問題や都市問題は、都市、産業及び社会の高度化とともにますます複雑化かつ広域化しており、また微量汚染物による環境汚染問題、快適環境の創造、資源の有効利用、公害の未然防止のための環境影響評価や環境管理計画等のような新たな側面も重要になってきている。

さらには1972年の国連環境会議での「人間環境宣言」や1982年の国連環境計画・ナイロビ環境会議での「ナイロビ宣言」、1989年ハーグ環境首脳会議等に見られるように、環境問題は、世界的にまた地球規模で深刻な問題になっている。このため、本教室の役割は今日ますます大きくなってきている。

本教室には六つの講座が設けられている。また、工学部附属環境微量汚染制御実験施設、原子

## 京都大学とポリテクニク大学との学術交流に関する一般的覚書

京都大学総長とポリテクニク大学長は、両大学の教育研究の協力と交流を推進するために、ここに学術交流に関する覚書を作成する。

1. 両大学は、特に次の諸活動を行うことを奨励する。
  - (1) 学術資料、刊行物及び情報の交換
  - (2) 教員又は研究者の交流
  - (3) 学生の交流
  - (4) 共同研究及び研究集会の実施
2. 前項の諸活動の具体化については、両大学又はその関係部局で協議のうえ実施するものとする。
3. この覚書を変更又は解消する場合は、両大学の協議によるものとする。
4. この覚書は、日本語及び英語で作成され、両文書は等しく正文である。

平成2年（1990年）4月28日、ニューヨーク

京都大学総長    ポリテクニク大学長  
西島 安 則    ジョージ・ブリアレロ



エネルギー研究所原子炉保安工学部門、原子炉実験所廃棄物処理設備部門、環境保全センターとは密接な関係のもとに教育・研究を遂行している。

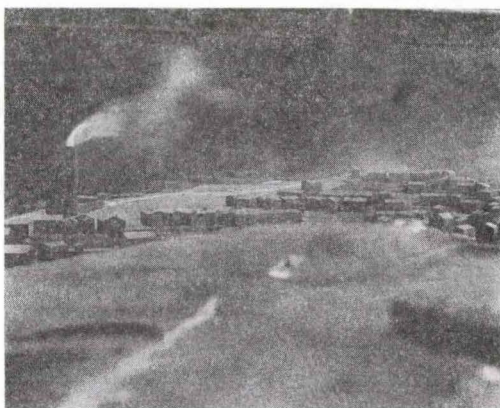
本教室の六つの講座で行っている教育・研究の内容を以下に紹介する。

**水道工学講座**；健康で豊かな都市生活を行うには上水の供給が基本である。供給される水は安全でおいしく、かつ確実に届けられなければならない。健康で安全な都市生活を創造・維持していくといった観点に立ち、都市給水、ライフライン工学、環境計画、リスクアセスメント等に関する教育・研究を行っている。

**放射線衛生工学講座**；基礎教育として、ラジオアイソトープ計測の実際の習熟、大型計算機の使用に関連する知識の習得等がなされる。また次のようなテーマの研究が遂行されている。放射性物質の環境生態学（生物濃縮、食物連鎖、人体影響）、放射線環境モニタリング、環境被曝線量評価、土壌・地下水汚染の予測と制御、環境放射能の移行と蓄積の動態解析、窒素化合物による河川水質汚濁の解析。

**環境衛生学講座**；騒音や大気性状、悪臭の評価に必要な基礎研究を行っている。すなわち、汚染源から汚染物質が拡散したとき、どの程度の濃度になるか、あるいは騒音の発生源からある距離離れた地点での騒音レベルはどうか、といった研究を行っている。また、騒音や悪臭に対して人間がどう反応し、どんな影響を受けるかということも研究している。いずれも、環境アセスメント・アメニティー（環境の快適さ）の追求に必要とされるものである。

**衛生設備学講座**；人間の生産活動にともなって種々の汚染物質が排出されるが、この排出物を入力として取り入れ、資源化・再生を含め、処理・

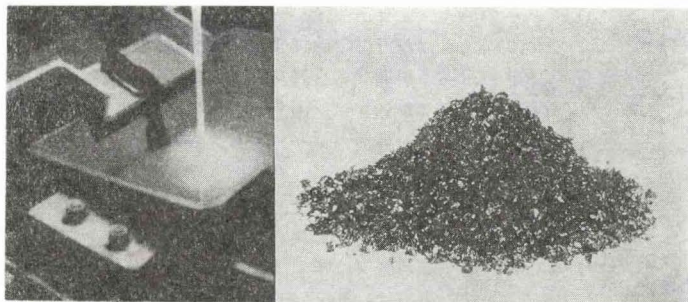


風洞における大気汚染研究

処分を行うシステムを社会の静脈系と呼ぶ。静脈系における物質・エネルギー・情報の流れを解析し、環境汚染防止と環境保全につながる静脈系のあり方を考究している。現地での実験・分析・データ収集、計算機支援による解析、プロセスシステムの設計・制御等の研究を行い、静脈系の設計とその管理に必要な工学体系を構築している。

**水質工学講座**；安全で快適な水環境を創造し、保全し、さらにその水を利水し、排水する際の水質を効率的に制御・管理していくための工学的方策について教育・研究を行っている。人と水とのふれあいを大切にする立場から水質問題をとらえ、自然水域での生態系の変化と水質変化・浄化能力の把握、効率的汚水処理技術の開発、汚濁物組成や微生物の分析手法の確立、水質評価等を中心に、現地調査やモデル実験により、コンピュータシミュレーションや機器分析を活用した研究を展開している。

**産業衛生工学講座**；各種産業活動と生活・自然環境との調和を高め、また労働環境の安全衛生を向上させることを主たる目的として教育・研究を行っている。現在の研究テーマとしては、産業廃水や廃棄物の発生構造と性状の評価、各種処理・処分法の開発・高度化、再利用・資源化、微量有害物等による水質汚濁の機構とモニタリング方法、環境汚染からみたテクノロジーアセスメントなどである。（工学部）



下水汚泥熔融スラグと水冷スラグ

## 平成2年度創立記念行事 学術講演会の開催

平成2年度本学創立記念行事として、春季学術講演会を下記のとおり開催いたします。本学教職員・学生の来聴を歓迎します。

## 記

日 時 平成2年6月15日(金) 午後3時から  
会 場 法経第二教室  
講 師 服部正明(本学名誉教授)  
演 題 ヨーガについて  
—インド思想史の立場から—

## 講師略歴

1948年京都大学文学部哲学科卒業。1949年大阪府立大学助手を経て、1961年京都大学文学部助教授。1973

年同教授。1983~1985年同文学部長。1988年退官。現在、大阪学院大学教授。

同氏は、古典インド哲学・宗教思想の広い領域、特に認識論・意味論を中心とする古典期の哲学体系の研究に優れた業績があり、また、大乘仏教の唯識思想をヨーガの伝統と関連づけて、インド思想史の立場から解明するなどインド思想史研究に多大の貢献をされている。

同氏はまた、日本印度学仏教学会理事、東方学会評議員、“Journal of Indian Philosophy”(Kluwer Academic Publishers)の編集顧問等を務められ、国際的にもインド哲学界の発展に寄与されている。

著書に『Dignaga, On Perception』『古代インドの神秘思想』他多数がある。(学生部)

## 平成2年度創立記念行事 音楽会の開催

本学では、6月18日の創立記念日を祝し、下記の音楽会を開催いたします。本学教職員・学生の来聴を歓迎します。

## 記

日 時 平成2年6月19日(火) 午後6時開演  
場 所 京都府立勤労会館  
京都市中京区烏丸丸太町下る  
(市バス・地下鉄烏丸丸太町駅下車)  
演奏者 石岡久乃・安宅 薫(ピアノ・デュオ)

## プログラム

モーツァルト

2台のピアノのためのソナタ K. 448

ドビュッシー

小組曲

池田哲美

風車

……… 休 憩 ………

チャイコフスキー

くるみわり人形

プーランク

シテール島への船出

ラヴェル

ラ・ヴァルス

## 演奏者略歴

石岡久乃

静岡県出身。6歳よりピアノを始める。ピアノを小島準子、G・コーツ、F・W・ジュヌアの各氏に

師事。室内楽を岩崎 淑、北爪利世の各氏に師事。1984年桐朋学園大学ピアノ科卒業。1987年同大学弦楽科伴奏研究員修了。現在、同大学附属「子供のための音楽教室」別科講師を務め、また、カローザ(室内楽演奏者の会)の会員としても活躍している。安宅 薫

東京都出身。5歳よりピアノを始める。ピアノを小島準子氏に師事。室内楽を岩崎 淑、末吉保雄、山田富士子の各氏に師事。1985年桐朋学園大学ピアノ科卒業。1987年同大学弦楽科及び声楽科伴奏研究員修了。現在、同大学附属「子供のための音楽教室」別科講師を務め、また、カローザの会員としても活躍している。

演奏者両名は、1986年3月カローザの第13回定期演奏会において「波うつ影」を初演。1987年7・8月イタリア・シエナのキジアーナ音楽院でR・ブレンゴラ氏に師事。11月イタリア・トリエステで開かれた第3回セルジョ・ロレンチ国際室内楽コンクールで第2位に入賞。1988年5月ダブリンミュージックソサエティーの招きにより、アイルランドのダブリン、コークでリサイタルを行い高い評価を得る。1989年6月サントリーホール定期演奏会NHK交響楽団モーツァルトシリーズで2台のピアノのための協奏曲を共演。国際コンクールや海外でのリサイタルの経験をもちピアノ・デュオチームの中でも、今後の活躍が特に期待されている若手のピアニストである。(学生部)

入場無料

備考：職員証又は学生証を持参して下さい。

定員は1,300名先着順とします。





# 洛書

日本嘘倶楽部が  
創立10周年を迎え  
るというニュース  
を耳にした。早速、

その事務局が置かれているという京都大学の某学部にある研究室を訪ねてみた。以下はその顚末である。

名にし負うあの嘘倶楽部のこと故、煙に巻かれては…と緊張している私を笑顔で出迎えてくれたのは、現在会長職にある某教授であった。部屋に案内されると、“truth LIES here”と書かれたプレートがまず目に入った。「これはアメリカ嘘協会から寄贈されたもので、真実ここにありという意味のはずなのですが、誰も信じてくれないんですよ」と教授は頭を掻いた。聞ところによれば、教授の指導を受ける学生達は、専門の研究もさることながら、嘘と真実を見分ける演習が選択科目に組まれていて（「嘘嘘実実セミナー」と呼ばれている）、それぞれ日夜努力奮闘しているとのこと。その最終試験は厳しく、これに合格しなければ、卒論の出来がいくら良くても、晴れて嘘倶楽部の会員資格となる方便学士号は授与されないらしい。まして博士号となればその努力は並の想像を超え、これまで幾多の大学院生達が涙を飲んできたとのことだ。「会員の人達というのは一体どういう方々

なのでしょう」と思わず尋ねると、「私が何か言う前から、もうこれは嘘、本当と見分けられますね。まあこれには、その場の状況を瞬時に、しかも総合的、直感的に判断するという能力が要求されますね」と、いともあっさりと教授。考え込んでいる私に教授の言葉は続いた。「嘘というファンタジーの中で、各人が本当のコミュニケーションを楽しむというのが会の憲章なのです。」

趣旨に大いに賛同した私は、教授の特別の計らいで入会審査を受けることになった。対策予想問題集が出回る危険があるので、その内容を公開できないのが残念であるが、最後の質問に「今の嘘は嘘でしょう」と答え、辞去したのであった。

## 日本嘘倶楽部訪問記

桑 名 麻 理

後日、事務局から通知が届いた。「慎重な審査の結果、貴殿の入会是否ということになりました」というものだった。傷心の思いで同封の書類に目を通すと、何とそれは以下の内容の入会手続書だった。「貴殿を当倶楽部の嘘会員と認定します。コードネームは U.S.O., 会員番号は 800 です。但し会員証にはこれ以外の嘘の番号、コードネームを使用しませんと無効となりますのでご注意ください。1990年4月1日、日本嘘倶楽部事務局」

私が早速 入会手続をしたのは言うまでもない。（くわな あさり 保健管理センター）

## 計 報

### 伊藤 立則 理学部助教授

本学理学部助教授 伊藤立則 先生は、4月8日逝去された。享年45。

先生は昭和42年3月北海道大学理学部生物学科を卒業、同43年4月同大学理学部助手、講師を経て、昭和56年8月本学理学部助教授に就任された。

先生の専門は海洋生物学・動物分類学で、特にソコミジンコ類・ファセトテクタ類の分類で多くの業績をあげられ、また海底の砂粒の間に住むいわゆる「間隙動物」について先駆的研究をされた。甲殻類の付属肢の原型に関する所説は世界的な注目を集めた。著書に『砂のすきまの生きものたち—間隙生物学入門』等がある。

ここに謹んで哀悼の意を表します。（理学部）

### 村地 孝 名誉教授

本学名誉教授 村地 孝先生は、5月12日逝去された。享年63。

先生は、昭和24年京都大学医学部を卒業後、本学医学部助手、名古屋市立大学医学部助教授、同教授を経て昭和49年京都大学医学部教授に就任、平成2年3月停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を授与された。この間、附属病院検査部長、医学部附属臨床検査技師学校長、医療技術短期大学部教授及び同主事、医用高分子研究センター教授等を歴任され大学の管理運営に貢献された。

先生の専門は酵素化学で、酵素に関する基礎並びに応用研究を活発に行い、特に細胞内蛋白質分解酵素カルパインとその制御因子カルバスタチンの構造、機能、遺伝子発現に関する研究成果は国際的に高い評価を受け、数多くの優れた研究業績を残された。また、日本生化学会会長、アジアオセアニア生化学者連合会長、第36回日本臨床病理学会総会長、アメリカ生化学分子生物学会名誉会員、英国生化学会機関誌バイオケミカルジャーナル及びヨーロッパ生化学会連合機関誌フェブスレター編集委員等を務められ、医学の発展に多大の貢献をされた。

ここに謹んで哀悼の意を表します。（医学部）